

「自分というものへの気づき」現象に関する探索的研究

— 大学生による自我体験の報告から —

天 谷 祐 子¹⁾

【問題・目的】

…私はおよそ12歳になっていた。…私は起き上がり、ふり向いて膝をついたまま外の樹々の葉をじっと見た。この瞬間に私は自我体験をした。すべてが私から離れ、私は突然孤独になったような感じがした。妙な浮んでいるような感じであった。そして同時に自分自身に対する不思議な問い、お前はルディ・デリウスか、お前はお前の友だちがそう読んでいるのと同じ人間か、学校で一定の名前をもち一定の評価を受けるその同じ人間なのか、お前は同一人物か。…

…小学校5, 6年の頃であったと思う。…私は本当に三浦裕子なのだろうか？確かに人は私のことを「裕子ちゃん」とは呼ぶけれど、私は本当に三浦裕子なのだろうか？私のまわりの人は、私の中に三浦裕子という人間の存在を認めているかもしれないけれど、私は自分の中に私という存在を感じることはできても、三浦裕子の存在を感じることはできない。私は私であり、その私は確かに三浦裕子である。それは確かにそうなのだけれど、しかし、私が私であると感ずる“私が”の私と、三浦裕子であるということとはどうしても結びつかない。何だか変だな。…

以上の2例は Böhler, Ch (1921) と梶田 (1988) からの引用である。これらの例にも見られるように、「私」とは一体何なのだろうか、という問題は、思春期の中心的な課題の一つであると思われる。それと同時に、このような自己に関する問題は古くから、多くの人々が悩まされてきた問題でもある。哲学者、文学者、宗教家、そして心理学者も、それぞれの立場から思索や研究を重ねてきた。また近年、さまざまな「私」に関する一般向けの哲学書、解説書も出版されている (例えば永井, 1996)。このことから、「私」というものの不確実感から抜け

出すために、各自の答えを見出そうという人が増加していることを示唆していると言えよう。

では、心理学の分野では、このような「私」に関する問題は、どのように研究されているのだろうか。概念的な面における提起や、心理学的構成概念の命名に関しては、Spranger (1924/1953) や Böhler (1926/1969)、西村 (1978) が行っている。Spranger (1924/1953) は、それ以前の安定した精神生活に新たに動揺をもたらす青年期を「第2の誕生」と呼び、その新しい心的特徴の兆候を3つ挙げた。その中の一つに「自我の発見」があり、“個性化の形而上学的根本体験・主観をそれ自身一個の世界として見出すこと”と説明した。また Böhler (1926/1969) は、日記や自伝的小説の分析から、青年期初期に起こる自我の質的变化が、自らの深い体験になっている場合があることを見出し、それを「自我体験」と名づけた。そしてそれを“思春期に起こる自我の構造的変化の突然の意識化”と説明している。ここに、この現象に対して「自我体験」という命名や、その概念的な面における提起がなされた。また日本においては、西村 (1978) が実証研究ではなく、臨床場面の経験的見地から、自我体験の定義づけや理論的説明を行っている。自我体験を“12・3歳ごろに起こる、自分が自分自身であるという、内なる自己との出会いの体験・一種の啓示的体験”とし、これを基礎に安定した青年期を迎えるとしている。しかし、客観的態度を取り得る、知性的な強い自我を持った人により体験され、一般的には起こりにくいと言及している。

また、自我体験に関する実証的研究は、高石 (1988) や渡辺 (1992) が行っている。高石 (1988) は、自我体験を“意識の中心である自我が、無限の時間的・空間的広がりを持った自己という内的世界の全体性の中にはっきりと位置づけられ、自我が自己と新しい結びつきを獲得して、より高次の統合性に向かう原動力となる体験”と説明している。さらに自我体験は、西村の主張するように一部の限られた人にもみられる現象ではなく、広く一般的に見られる現象であると主張している。そのよ

1) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程 (後期課程)

うな主張を基に、自我体験尺度を作成し、児童期から青年期を対象に質問紙調査を行っている。しかし、高石(1988)の自我体験尺度については、内容的には自我体験そのものではなく、自我体験が体験された結果生じる内容や、自我体験と関連性が高い特性を記述したものであると思われる。また渡辺(1992)は、Jamesの自己意識構造論を背景として、自我体験を“自分をいわば経験的具体的な個人としての自己とは、完全に同一性が成立しがたいものとして体験し、自問する、たとえば「私は」と言って「私である」と続けるのにためらいと滞りをおぼえてしまうこと”と定義した。そしてそれを基に、大学生を対象に、自我体験の例を示した上での自由記述形式の調査を行った。渡辺(1992)の研究は、具体的な自我体験の例を多く提示し、自己意識の中での自我体験の意味に焦点を当てて考察している。しかし、自我体験の例を提示するにとどまり、自我体験そのものの様相をまとめた考察はほとんどなされていない。

さらに、臨床的な観点からは田畑(1985)が考察を行っている。田畑(1985)はその一臨床事例のなかで、自我体験に注目し、あまりに早い時期の自我体験は、思春期に至り心理的危機をもたらすことを示唆している。これは、自我体験が、思春期の精神的健康にも深く関わっていることを示しているものと思われ、自我体験の重要性を示唆している。

また、「自我体験」と明記しているわけではないけれども、それに近いものに関して、ワロン(1983)が考察を行っており、その重要性を指摘している。ワロン(1983)は、“青年期以前の子供の知的活動が実証主義的段階(具体的な事実にのみ依拠する思考)に留まっているのに対し、青年はものや人の存在理由、それらの起源と運命を見出すことが不可欠だと思うようになる”と述べている。ここでの“ものや人の存在理由、それらの起源と運命を見出すこと”がまさに自我体験を指していると思われる。さらにワロン(1983)は“このような形而上学的関心は、適当なこやしと導きを与えれば、原因を深くたどっていく科学的関心・社会的関心となり、また知的領域では懐疑の精神・構築・発明・冒険・創造の精神とが交互に、また結び合って現れる”と述べている。これは、自我体験により得られたこのような関心が、その後の科学的関心や知的領域の懐疑の精神につながっていくと解釈できる。このような点でも、自我体験はその後の発達に関して、重要な側面を担っていると考えられる。

以上のような、自我体験についての示唆や考察、一部の調査研究などでは、自我体験がどのような現象なのかという具体的なレベルで自我体験の様相をまとめ、明ら

かにしようという視点を持ち合わせていない。また、自我体験に関する定義が不明確であり、研究者間で一貫していないと思われる。よって、自我体験の定義の明確化、自我体験の体験される様相の明確化、自我体験に関連するいくつかの要因を提起することは重要である。また、児童期から青年期にかけての自我・自己に関する研究、中でも特に児童期から青年期への移行期の自我に関する実証的研究はほとんど見られない。その点からも、児童期から青年期にかけて焦点を当てた自我体験に関する研究は、移行期の自我のあり方を解明する上で有意義であると思われる。

本研究では、児童期後半から青年期にかけて、「どうして自分があえてこの自分なのか」「自分は他のなにものでもない自分である」というような、「自分という存在そのもの」に対する疑問や気づきが顕在化する現象、すなわち、「私」に関して最も基本的な視点を獲得し、暗黙の常識・存在に関する問いかけや気づきが見られる現象に焦点を当てる。そしてそのような現象を「自我体験」と呼ぶこととする。よって、本研究では、まず第1に、実際に面接調査を行うことにより、自我体験とはどのようなものかといった自我体験の定義の明確化、そして自我体験がどのように体験されるのかといった自我体験の様相を把握することを目的とする。そして第2に、他の心理学的概念との関係を含めた、自我体験の概念的な面に関しての理論を設定することを目的とする。自我体験に関する研究を進めるにあたって、まず、調査により自我体験を引き出すための方法論を確立し、自我体験という現象が確かに存在することを示す必要がある。高石(1988)によると、自我体験は10歳前後に見られることが多いのであるが、本研究では言語的な意思疎通が容易であり、レトロスペクティブに自身の体験を内省できる大学生をまず対象として、面接法により自我体験にアプローチすることとする。また、本研究は、今後自我体験に関する組織的な調査のための足がかりとしての探索的な研究であり、自我体験の質的な側面に主に着目する。

【方法】

- 対象：大学生の男女18名(男9女9)を面接対象とした。この面接対象は、以下のように選択された。大学生48名を対象に、先行研究における自我体験の具体例や、筆者が推測した自我体験の具体的な内容を、個別に口頭で説明し、自我体験またはそれに近いような体験をしたかどうか質問した。教示文は以下のとおりである。「小さいころ、自分で自分を意識したり、自分について問いかけはじめたりした頃の経験を覚えています

か。小さい頃は自分について考えるという、内に向かう視点は持っていなかったけれど、その視点を持つようになったり、また“自分はー”とか、“自分はあの人でもこの人でもなく、自分は自分だ”とか考えはじめたりした頃の体験を覚えていますか。」というものであった。全対象48名のうち、自我体験を体験したと報告した18名に面接を依頼し、本研究の面接調査対象とした。

- 手続き：1対1の半構造化面接法を採用。被面接者の了承を得て、面接内容をテープに録音した。面接における質問内容は以下のとおりであった。①自我体験の内容、②自我体験に関する周辺情報（体験初発年齢、自我体験に至るきっかけ、同じ自我体験を体験した回数、自我体験を体験した前後で何か変化があったか、

他者に体験内容を開示するか、後になって体験内容を思い出すことがあるか）についてであった。

- 分析方法：テープに録音した面接内容を逐語録に起こし、筆者と大学院生とで、自我体験かどうかをチェックシートにより判断する。チェックシートの項目は、自我体験とみなせるかどうか、自我体験の内容、自我体験に関する周辺情報についてから成り立っている。

【結果】

本研究は、実際の自我体験に面接法によりアプローチするものである。実際面接から得られた主な自我体験の例を2例示す（表1参照）。表中で下線を引いた箇所が、この被面接者が自我体験を体験したと判断した箇所となっている。

表1 面接から得られた自我体験の例（一部抜粋）

- | | |
|---|--|
| <p>ア. 28歳女性：下位側面Ⅰ①自分の実在への疑問、下位側面Ⅱ①独自性</p> <p>H 10, 1, 2, 3歳くらいからだと思うんだけど、そういうことは中学3年くらいをピークに良く考えていたんだと思うんですけど。</p> <p>J 例えば具体的にいうと？</p> <p>H その時の言葉でいえば、例えば、<u>自分ていうのは、本質は何なんだろうとか、いろんな知識がついているから、中学生だから、人間も生物だし、とか、そんなことも考えて、だけれども、同じ遺伝子を持ったたっくさんの人間が居て、けど、私しか私でないし、それはなぜだろうとか、その必要性は何なんだとか、本当にそうなんだろうとか、元をたどったらどこに行き着くんだろうとか、そんなことだと思うんだけど。</u></p> <p>J そうやって考えて、何か解決したとか、そういうことはありますか。</p> <p>H <u>その時はただ不思議で、自分がよって立つものが非常によるべないもののような気がしていて、なんとかその答えを見つけたいと思っていた時期も確かにあったんですけど、あるときから、いろんな問いは持っていたんですが、自分が何かとか、自分は他の人とは違って自分は自分だとかっていうことも考えたんですけど、それは私の場合もう少し大きなテーマの一部で、何で人は生きていくのかというようなことを考えていたんですよ。で、その一環として、多分、<u>私が私である必要性とか、私は私であると思っているが、それは本当かとか、みたいなことを一環として考えていたんだと思います。</u>あるときから何か、方向の転換が起こって、なぜ生きていくかという風に考えるのは問いの意味がないということ考えたんですよ。問う意味のないことであって、生まれてきたということは変な話にいきますけど、もうすでに結末で、かえることの出来ないことで、私が私として生きていくことももう変えることは出来ないことだから、なぜ生きるかを考えるのではなく、どう生きようかということを考えるべきだみたいなことを、あるときから、高校生くらいからでしょうか。思って、で、その後は時々思い返して、ああ、不思議だ、人間というものは、とか、変な、年寄りじみた考えにふける以外は特にその問題については悩んだりっていうことはなくなったように思うんです。</u></p> | |
| <p>イ. 21歳、女性：下位側面Ⅰ③自分への起源・場所への疑問</p> <p>H <u>自分の存在自体にすごい不安を感じたのが、小学校5, 6年からかな。とにかく小学校の後半くらい、</u>
— 中略 — <u>きちんと覚えていないけれども、自分が人間であることについていうかなんていうか、親のもとに生まれて来る訳なんだけれども、それは宇宙の中の、地球があって、その中にちっちゃいところにぼつんって生まれただけで、何かすごい恐ろしい、自分のその小ささっていうか、なんかね。自分が死ねば別にそれはそれでもうそこでプツリ終わっちゃうわけでしょ、そういう不安っていうの、あとなんか、両親とのつながりとかいうの？</u></p> <p>J それは同じ時に考えたの？</p> | |

- H 多分。だから両親とはまあ、一応親から生まれたには違いないんだけど、一体それ以上に何の関係があるの？って。とりあえず親として一緒に住んではいるけれど、結局は一人ぼっちなんじゃないかとか、うん。そういうのが不安。
- H 自分が人間であることが不思議でたまらなかった。ほんとに、なんていうの、地球があること自体、自分の存在自体がすごいなんか不思議でしょうがなかった。自分が名前もらってさ、生きてるわけでしょ。だけど、死んだらそれはそれで終わりじゃない？何も残らないことない？っていうか、自分で何だったんだろうってことにならない？それがすごい恐くて、こういう世界があること自体怖い時期もあったんだって。たまにそんなことを考えている自分が何かすごい不気味だった。— 中略 — こういうことを考えていたってっていうか、みんなそんなことは当たり前だと思って生活しているわけでしょ。こんなこと考える私がちょっとおかしいんだわって言うか、なんか、そういうことを考えることをやめる。

注) が自我体験の下位側面Ⅰ、 部が自我体験の下位側面Ⅱと思われる箇所。
Hが被面接者、Jが面接者の発言である。

また本研究では、表1で見られたような自我体験が、想起できた内容がいまいで判断がつかない2名を除き、16名から16体験報告された。以下はその調査結果である。

①自我体験の内容

まず、自我体験の内容を検討する。まず、すべての自我体験の報告に関して、状況依存的でなく存在としての自分を意識するというような、自分を対象化して見るということができていると考えられた。また、体験内容を、表1の自我体験の実線部（例えば、私が私である必然性は何だろう。）のような問いかけの形式と、波線部（例えば、私は私だと思っているし、それでいいんだ。）のような意識する形式との2種が見られると考えられた。そこで、この2つに分けて検討した結果、問いかけのみの形式が見られたものが8名、意識する形式のみが見られたものが5名、どちらの形式も見られたものが3名見られた。具体的な内容に関しては、表1のような内容ははじめとして、問いかけの形式では、“自分は本当に自分なのか”、“私って何だろう”、“自分はどこから来てどこへ行くのだろうか”、“自分はなぜここにいるのか”、“自分というものはどこにいるのだろうか”という疑問や、自分の名前と自分自身との間の違和感、自分の存在自体が不思議であるという感覚等が報告された。また意識の形式では、自分の体と意識との関係から“自分はどうしても自分でしかない”という感覚、“自分は自分だ”という感覚等が報告された。

②自我体験に関する周辺情報

本研究により得られた16名の自我体験に関する周辺情

報を検討する。自我体験の体験初発年齢に関しては、小学校時代が12名と半数以上を占めた。自我体験に至るきっかけに関しては、自我体験の内容に直接関連するきっかけがあったと報告するものは6名、自我体験の内容に直接関連しないきっかけがあったと報告するものは7名、きっかけがないと報告するものは2名、きっかけを想起できない人は1名であった。自我体験を体験した回数に関しては、1回のみ自我体験を体験したと報告するものが2名、2回以上同じ体験をしたと報告するものが14名であった。自我体験の前後で何らかの変化が見られたと報告されたものは、11名であった。自我体験時に、体験内容を他者に話すなどの開示は、3名から報告された。また、15名に、「あの時はあんなことを思っていた」と自我体験を思い出すという報告が見られた。

【考察】

1. 自我体験の定義

自我体験の質的な側面における結果を基に、自我体験に関する今後の分析のために概念的定義を設定した。自我体験とは「自分というものを対象化して見ることができるようになった後、自分という存在への問いかけ（自分の存在とは何だろう。自分はどこから来てどこへ行くのか。など）、自分という存在への感覚的違和感（この姿形を持つ自分が本当に自分なのか。）が見られ、問いの答えを見出すための思考が見られたり、客観的に存在する自分、周囲とは一線を画した自分というものへの意識に至ったりする体験」とした。図1は、自我体験の概念的定義の仮定をモデル化したものである。図1Aの「自分を対象化して見ることができるようになる」ことは、自我体験に至る必要条件と考えられる。自分を対象

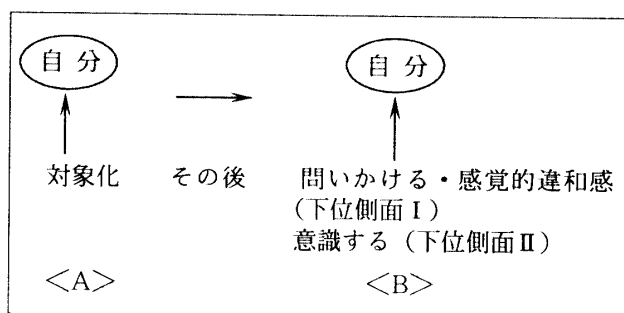


図1 自我体験の時系列モデル

表2 自我体験の操作的定義（下位側面）

I. 自分という存在への問いかけ	
①	自分の実在への探索・疑問（例：自分はなぜ自分なのか。自分自身がこの世に存在するということがどうということなのか。自分という存在はいかにして成り立っているのか。など）
②	自分のものと同定しているもの（名前・体）への違和感（例：鏡などで自分を映していて、これは自分であるはずなのに、一体これ(自分)は何なのか、誰か。など）
③	自分の起源・場所への疑問（例：なぜ自分はここに、この時代に、こうやって存在しているのか。どこから来て、どこへ行くのか。など）
II. 自分というものへの意識	
①	独自性（例：自分は唯一の存在である。私は他の人とはいれかわれない私である。）
②	自分の実在の実感（例：自分は自分なんだ。）

化して見るができないと、自分について考えられないからである。図1Bは、自我体験の様相で、自分に対して問いかけたり、強烈に意識したりすることを示している。

また、自我体験の概念的定義が、具体的な体験として実際どのような形であられるのかを分類・解釈するために、下位側面を設定した（表2参照）。この下位側面は、調査を実施する以前に、ある程度仮定していた。しかし、調査実施後、自我体験の概念的定義に照らして、自我体験だと思われる体験が出てきたが、事前に設定した下位側面のどの部分にも属さないと思われた。よって、新たに下位側面のカテゴリーを追加し、最終的にこの形となった。

また、どこまでが自我体験とされる範疇に含まれるのか、という点に関して、自我体験の内容そのものは、どの世代においても見られる可能性がある。しかし、その

うち最も初期に見られる気づきを自我体験とみなすこととする。その根拠として、自我体験を体験する以前は、「自分が存在する」ということは自明であり、疑問を抱くことはない。しかし、自我体験を境に、それまでなかった考え方が初めて生まれ、世界が再構築されることに、自我体験の意味があると思われるからである。そして、自我体験を境に、自分という存在が成り立っている基盤を意識化することで、安定した自我の基盤が形成されると考えられるからである。

2. 自我体験の様相

本研究の結果から、自我体験のおおまかな様相をまとめると、以下ようになる。自我体験とは、主に小学生時代（6歳から12歳）に、ある種のきっかけを境に、「自分とは何だろう」や「自分は果たしてその名前と呼ばれるところの自分なのか」等の問いかけの形で多く見られる。意識の形式も見られるけれども、その内容は「自分は自分でしかない」といった種類のものであり、「自分とは何だろう」という問いに対する真の答えではない。「自分とは何だろう」という問いに対する絶対的な答えは存在せず、自分自身を納得させるための答えでしかないと思われる。しかし、それによって、自分という存在に対する基盤が形成されると思われる。従って、様相としては、ある一定期間頻繁に問いかけの形で見られた後、自分自身を納得させるか忘れるかにより、その後見られなくなる。自我体験の内容を他者に開示することはほとんどなく、自身の中で何度も繰り返す。これにより、昔の体験であるにも関わらずありありと思い出し、印象的なものとなる。

3. 自我体験生起の理由

では、なぜ自我体験が生起するのであろうか。自我体験の生起に影響を与える要因としては、発達の要因と環境要因の2つの観点から考えられる。まず発達の要因としては、第1に、メタ認知的機能を含めた認知機能の発達が挙げられる。発達心理学辞典（秋田喜代美担当）によると、認知発達に伴いメタ認知的機能が発現するといわれている。メタ認知的機能とは、「自分の遂行している認知過程の状態や方略を評価し、行動の調節・統制を行う機能」であり、このような機能が、「自分を対象化して見る」ために必要であると考えられる。また第2に、直接的・具体的な体験を越えて思考を働かせる抽象能力の発達が挙げられる。抽象的思考の発達は、自己の思考過程そのものの意識化や客観化を可能にするだろうと思われる。浜田（1993）は、抽象の中で、外の世界へと広がるベクトルがまず発現した後、自己の内面など、内へ

向かうベクトルへ向きを変えることを指摘しているが、この心性を「外から内へのコペルニクス的転回」と呼んでいる。さらに浜田(1993)は、“外に向かっていったベクトルは11, 2歳ころから少しずつ内に向かいはじめ、ある時はっと気づく”と述べている。本研究から、自我体験では自分を対象化して見る事が示されたが、これはここで言う抽象の獲得、さらに抽象における、内へ向かうベクトルの獲得を示していると考えられる。この思考の内的ベクトルへの変化が、構造的に自我体験を引き起こす一要因となっていると考えられる。また、自我体験の初発年齢が小学校で見られるという本研究の調査結果からも、この心性の獲得の11, 2歳という年齢と近く、それを裏付けていると思われる。そして第3に、自意識の発達が挙げられる。自意識に関しては、自我体験を体験する以前から発達すると思われるが、意識される順序としては、自分のより具体的な側面から発達が進むと考えられる。いくつかの自分に対する具体的な側面を統合して、より広い視点から自分という存在について考えることができるようになることが、自我体験には必要であると考えられる。最後に、それまで得た知識をまとめる力や、他者から学んだことを内在化させることが可能となることが挙げられる。この側面の発達が進むと、自身の周囲の事象を自分自身のものであるとして、自発的に「実感」として感じるようになると思われる。そしてそれらがさらに発達し、自発的な問いが出現すると考えられる。この自発的問いの中で、「自己」に関して最も基本的な問いが、自我体験として出現すると考えられる。

また、環境要因としては、以下の2点が挙げられる。第1に、時間的・心理的余裕が挙げられる。青年期の自我同一性の模索は、青年期の課題としてよく扱われるが、これは現代の青年(学生)が自分の進路や人生について試行錯誤できる時間的余裕や心理的余裕があることも、その一要因ではないかと考えられる。以上のようなことは、自我体験を体験する世代と思われる小学生についても当てはまると考えられる。そして第2に、自我体験の内容に近い、刺激となるイベントが挙げられる。また、本研究の面接調査で、自我体験を体験するきっかけを質問したところ、「星を見ていて思った」など、自我体験の内容とは関連のないきっかけを報告した被面接者が7名と、半数近くを占めた。このことから、被面接者が「これが自我体験を体験したきっかけだ」と報告しているようなきっかけは、実は自我体験を生起させている本来のきっかけとは異なっている可能性があると思われる。これは、自我体験を体験するまでに、以上に述べたような発達の要因等が潜在的にそろう、ちょっとしたきっかけで閾値を越え、自我体験を自覚するに至るとい

う働きがあるからではないかと思われる。

つまり、以上のような発達の要因や環境要因が整った上で、自我体験の内容に近い・もしくは関係の薄いイベントに刺激を受け、感受性の高い子が、自我体験を体験したと自覚できるようになると考えられる。

4. 自我体験と他の心理学的概念との関係

では、自我体験の位置づけはどのようなものであろうか。ここで、自我体験の定義を一言で述べると、自我体験とは、主に思春期に見られる、それまで自明であった、自分という存在への疑問・深い洞察・感覚的違和感である。

自我体験と他の概念との関わりを考えて見ると、まず、青年期の自我同一性の模索・確立と、自我体験との関係が問題となるだろう。ここで言う「青年期の自我同一性」とは、社会の中で、自分がどのような者で、どこに位置づけられ、いかに生きるかといったことに関して、模索を行い、自分にふさわしい解決の道を見出していくことを指すと思われる。つまり、青年期の自我同一性は、自分の存在がなぜここに存在するのか、といった存在の基盤そのものに対する問いを含んでいないと思われる。青年期の模索は、「自分がここに存在する」といったことはすでに前提として成立した上での模索と考えられる。それに比して、自我体験は、その前提そのものに対する問いを扱うのである。よって、自我体験は、青年期の自我同一性の模索の前段階もしくは基盤となるものであると位置づけられる。

また、青年期の自我同一性の特徴としては、比較的長期的なスパンで見ても徐々に形成・達成されたり、またその人にとって重要なイベントがあれば組み直されたりするというようなものである。そして、その時の状態をあらわす指標が、自我同一性であると考えられる。それに比して、ある特定の時期に、具体的な現象として体験的に自覚されるものが自我体験である。ここに、自我同一性と自我体験との性格的な区別がなされよう。

以上のことをまとめて、図2のような経路が構造的に仮定される。このモデルは、自我体験と自我同一性の関係を示したものである。もちろん、自我体験を体験しない人・自覚できない人も存在するので、すべての人が図のような経路を経るわけではない。あくまでも一経路である。

また、仲山(1994)は、自己を取り巻く多様な世界に対する意識的・無意識的の観点を獲得することで、青年期の時間的展望が開け、世界観が形成されると述べている。仲山のいう「自己を取り巻く多様な世界に対する観点」、つまり自己を取り巻くより広い視点が自我体験により獲

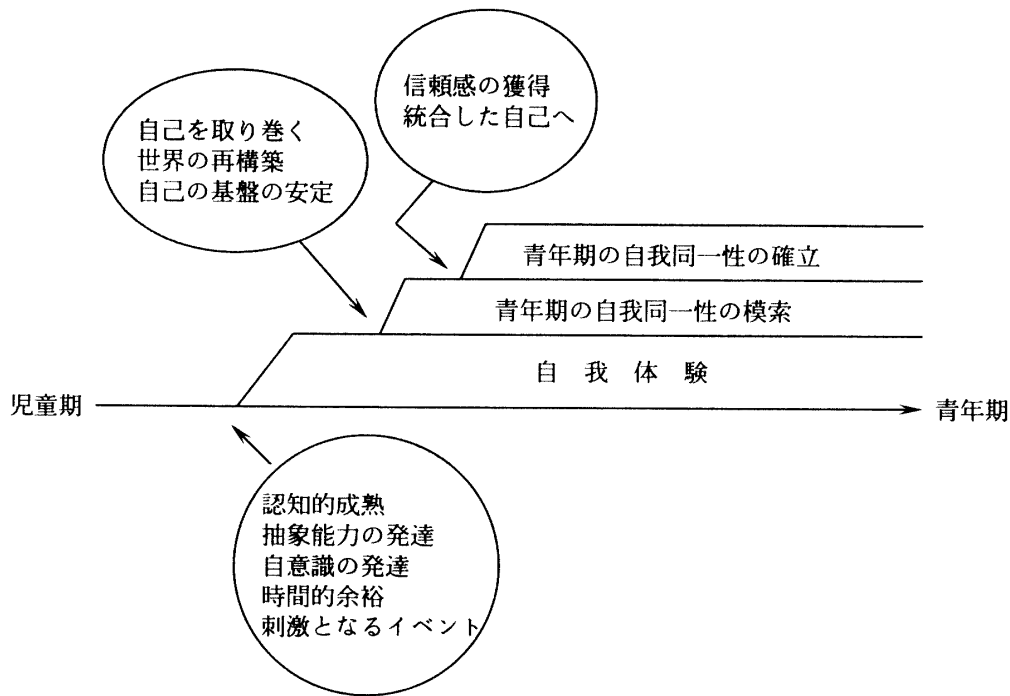


図2 自我体験の理論的位置づけ

得られ、青年期の世界観形成につながっていくと考えられる。

【まとめ・問題点】

本研究は、自我体験に関して、実際の面接調査を行った初の試みであった。それにより、自我体験という現象が存在するか否かを検討し、それを基に自我体験の定義の明確化、様相の把握、そして理論設定をすることが目的であった。大学生を対象に、半構造化面接を行ったところ、自我体験と思われる体験が得られ、それを基に自我体験の様相が明らかとなった。そして、本研究から、どのような自我体験が引き出されるのかといった、ある一定の方法論を提示したことにもなった。

しかし、本研究は、自我体験に関する探索的な研究であり、問題点は数多くある。まず、本研究では、対象が18名と少人数しか得られなかった。よって、実際自我体験はどのくらいの比率で見られるものなのか、自我体験が主にどのように体験されるのか、本研究からはわからない。さらに、調査対象を大学生としたために、自我体験を体験した当初から時間を経たことで、記憶の変容が起きている可能性も考えられる。

今後は、組織的な調査により、自我体験を体験したかしないかで、その後差が見られるのかを調べる。また、自我体験のメカニズム、その意味、自我同一性との関係などを実際調べることも、自我体験に関する理論を構築

することに有効であると考えられる。他に、自我体験と関連がある可能性のある概念として、自意識（公的自意識・私的自意識：菅原，1984）、個人・社会志向性（伊藤，1993）、自己への信頼（天貝，1995）、独自性への志向、自己の価値、恒常的な自己評価の維持、などが挙げられる。また、実際自我体験を体験する直前直後の人々を対象とし、調査を行うことも必要となるだろう。

参 考 文 献

天貝由美子. (1995). 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響. 教育心理学研究. 43. 364-371.
 Buhler, Ch. (1969). 青年の精神生活 (原田茂, 訳) 東京: 協同出版. (Buhler, Ch. (1926). Das Seelenben des Jugendlichen. Stuttgart: Gustav Fischer Verlag.)
 浜田寿美男. (1993). 発達心理学再考のための序説. ミネルヴァ書房
 浜田寿美男. (1993). 個立の風景 ミネルヴァ書房
 伊藤美奈子. (1993). 個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討. 心理学研究. 64. 115-122.
 梶田叡一. (1988). 自己意識の心理学. 東京大学出版会
 仲山佳秀. (1994). 青年期の知的発達 平山諭・鈴木隆

- 男(編) 発達心理学の基礎Ⅱ機能の発達 ミネルヴァ書房
- 西村洲衛男. (1978). 思春期の病理:自我体験の考察. 中井久夫・山中康裕(編), 思春期の精神病理と治療 (pp. 255-285). 東京:岩波学術出版社.
- 岡本夏木・清水御代明・村井潤一. (1995). 発達心理学辞典 ミネルヴァ書房.
- Spranger, E. (1957). 青年の心理(土井竹治, 訳) 東京: 刀江書店. (Spranger, E. (1924) Psychologie des Jugendalters. Hedielsberg: Quelle & Meyer Verlag.)
- 菅原健介. (1984). 自意識尺度 (self-consciousness Scale) 日本語版作成の試み. 心理学研究, 55, 184-188.
- 田畑洋子. (1985). “お前は誰だ!” の答えを求めて. 心理臨床学研究, 2, 8-19
- 高石恭子. (1986). 自我発達における小学校中学年の位置づけ(2): 自我体験度を通して. 日本教育心理学会第28回総会発表論文集, 372.
- 高石恭子. (1988). 青年期の自我発達と自我体験について. 京都大学教育学部紀要第34号, 京都大学, 京都, 210-220.
- 渡辺恒夫. (1992). 自我の発見とは何か. 東邦大学紀要第24号, 25-50.
- ワロン, H (浜田寿美男訳編) (1983). 身体・自我・社会 ミネルヴァ書房
- (1998年9月16日 受稿)

【謝辞】

本研究を進めるにあたり, 名古屋大学教育学部 小嶋秀夫先生, 名古屋大学教育学部 村上隆先生には貴重なご指導を賜りました。また, 被面接者の皆様には, 調査に快く協力していただきました。ここに記して感謝を申し上げます。

ABSTRACT

A Report on “ego-experience” by Undergraduates as an Approach to Investigating the Phenomenon of “the Realization of One’s Existence.”

Yuko AMAYA

This paper reports on an exploration of “ego-experience,” a term coined by Spranger (1924) and Buhler (1926) to refer to the phenomenon of the realization of one’s existence. Although the concept was defined almost 75 years ago, it has never before been scientifically investigated. In this study, 18 undergraduates, who expected to have an “ego-experience”, participated in individual semi-structured interviews. The results were as follows. (1) vivid “ego-experiences” are reported. And 16 undergraduates reported having similar and vivid “ego-experiences”. (2) “Ego-experiences” were described as comprising questions about one’s existence along with a sense of disharmony with oneself, and as comprising consciousness about oneself. (4) “Ego-experiences” made a lasting impact because they frequently occurred within an limited period of time.

Key words : “realization of one’s existence,” “ego-experience,” semi-structured interview, puberty